



羅針盤



飯塚 一
Hajime Iizuka

廣仁会 札幌乾癬研究所所長／旭川医科大学名誉教授

皮膚科診療における内服薬の進歩とその課題

本号のテーマは、内服薬が特徴的な有効性を示す皮膚疾患である。皮膚科の治療においては、外用薬が重要な位置を占めるとはいえ、多くの内服薬も使用されており、皮膚科医は、それらを適宜選択しながら日常の診療を行っている。

本号では、乾癬に対するアプレミラストといった新薬のほか、古くから知られている薬剤の意外な効用を中心に、トピックスを交えて項目を選択した。例えば、ヒドロキシクロロキンは、欧米では長い実績がある薬剤であるが、古川福実 前 和歌山県立医科大学教授を中心とした日本ヒドロキシクロロキシン研究会の努力で、世界初となる治験を経て、わが国でも使用可能となったのは、わずか2年前のことである。

また、プロプラノロールは古典的な β -ブロッカーとして知られる薬剤であるが、小児血管腫に対する有効性がフランスから報告されたのは2008年のことで、わが国での認可が2016年であるから、わずか8年で日常の臨床応用に至ったことになる。そこには、治験の質を損なうことなく、少しでも早く患者さんのもとに薬剤を届けようという工夫があるし、そもそも、プロプラノロールのような薬剤が、血管腫に効くこと自体が驚くべきことで、セレンディピティ*は依然として存在するのである。

色素性痒疹に対するミノサイクリン塩酸塩の、また好酸球性膿疱性毛嚢炎に対するインドメタシンの有効性はよく知られている。しかしなぜ、前者でテトラサイクリンがミノサイクリン塩酸塩ほどの有効性を発揮できないのか、また後方で、なぜインドメタシンが他の非ステロイド性抗炎症薬(NSAID)より有効性が優れるのか、実

は専門家でも容易に答えられない多くの疑問が残されていることも、今後の検討課題として、併せて触れておきたい。

なお、編者の総説の内服ステロイド(→p.838, 総説1)だけは、特徴的な有効性を示すというより、使用にあたっての比較的新しい概念についての記述である。ステロイドが強力な抗炎症作用を示す一方で、生体反応としての炎症の減弱に伴い、感染症をひきおこしやすいことは容易に類推できるため、感染症発症に際しては、原則、ステロイドを中止することが、従来の常識的な判断であろう。しかし“感染症、即ステロイド中止”という対応が、逆に重篤な障害をもたらしかねないという見解について、警鐘も込めて述べたものである。これは、近年の免疫再構築の概念の一般化に伴って現れてきた考え方であり、薬剤使用にあたって、医師は自分が何を狙っているのかを再確認すべきであり、要は薬剤選択にあたり、その薬理を十分理解して使用しなければならないというあたり前の事実の典型的な表現にほかならない。

本号には、専門家による多くの貴重な情報が盛り込まれている。これらの情報が、明日からの皮膚科の日常診療の現場で役立つことを祈ってやまない。

*セレンディピティ (serendipity) ……偶然に予想外のものを発見すること。また、何かを探しているときに、探しているものとは別の価値があるものを偶然見つけること。「セレンディップの3人の王子」という童話にちなんで名づけられた。それによると、王子たちは旅の途中、いつも意外な出来事と遭遇し、その聡明さによって、彼らがもともと探していなかった何かを発見する。